



275  
特 252  
597



# 三菱の出産道灰

三菱鑛業株式会社

# 始





時252  
597



昭和拾貳年  
版

の北海道炭

三菱鑛業株式會社





業鑛菱三るけ於に道海北

美唄 礦業所

(空知郡美唄町字美唄)

大夕張 礦業所

(夕張郡夕張町字大夕張)

雄別炭礦鐵道株式會社

雄別 礦業所

(阿寒郡舌辛村)

尺別 炭坑

(白糠郡音別村)

浦幌 炭坑

(十勝郡浦幌村)

茂尻 礦業所

(空知郡赤平村)

小樽 支店

(小樽市色内町八丁目三番地)

室蘭 出張所

(室蘭市海岸町四番地)

函館 出張員

(函館市東濱町四番地)

札幌 出張員

(札幌市北五條西六丁目二番地)

釧路 出張員

(釧路市古川町七番地)

留萌 出張員

(留萌町南記念通六八二番地)

目次

留	釧	室	小	主要港に於ける當社の荷役設備	茂尻	浦幌	尺別	雄別	大夕張	美唄
港	港	港	港	所	炭業所	炭坑	炭坑	炭業所	炭業所	炭業所
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
二七	二六	二四	二一		一八	一五	一二	九	五	一

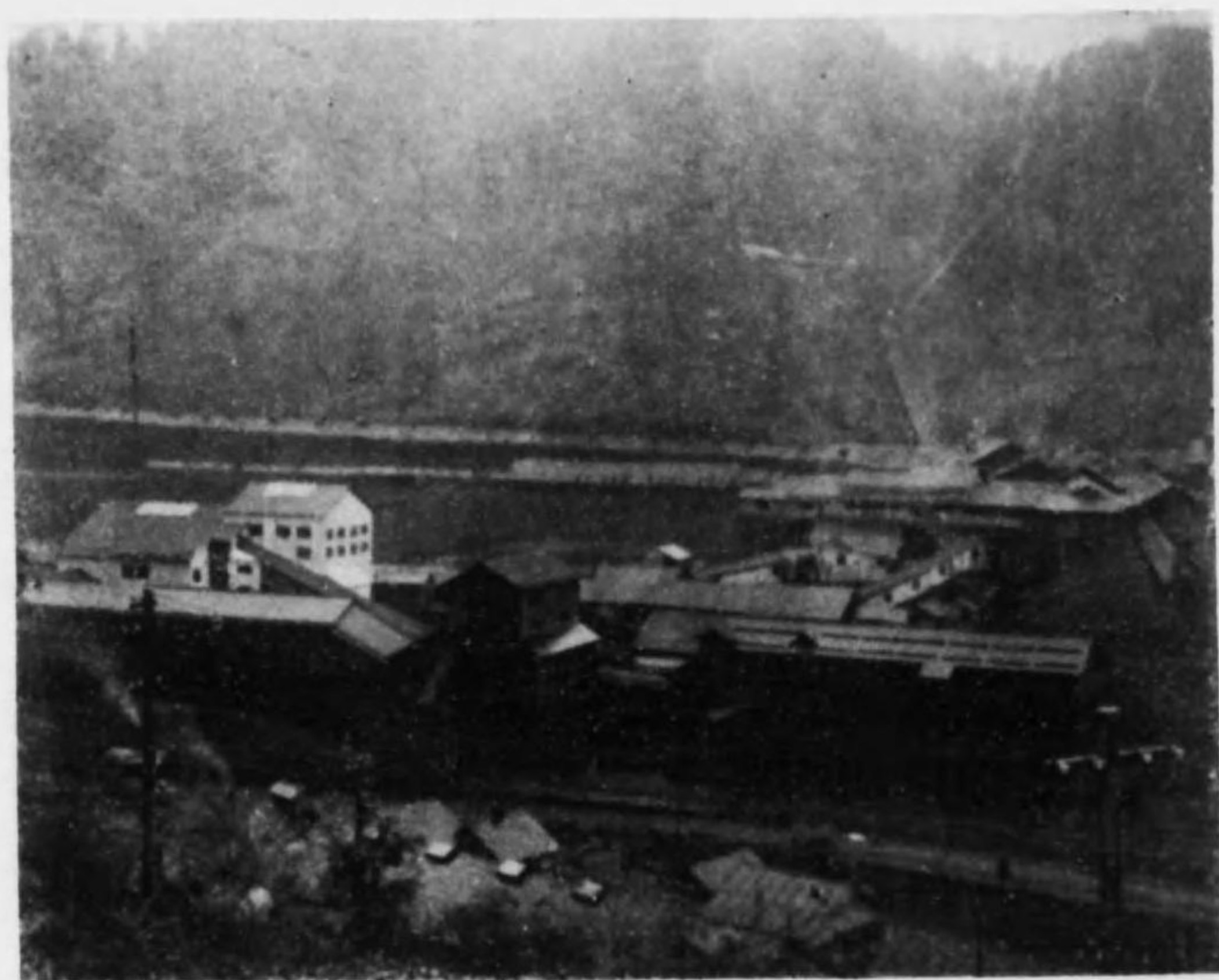


## ○美 唄 礦 業 所

**位置及面積** 鑛區は石狩國空知郡美唄町及三笠山兩村に跨り、主として美唄川上流及同支流「ウエンシリアンビバイ」川の流域を占め、北方は奈井江炭田に、南方は奔別及峰延炭田に相接す鑛區面積は採掘試掘を合せて約一千一百万坪なり

美唄炭山驛は省線美唄驛より美唄川に沿ひ上ること八籽、積出港手宮、室蘭、函館を距る夫々一〇一籽、一六六籽、三四七籽の地に在り常盤臺驛は美唄炭山驛より上ること二籽、共に石炭發送驛なり

**沿革** 明治二十七、八年頃黒柳金二郎氏初めて本鑛區中主要部分の鑛業權を獲得せしが明治四十四年十一月前鑛業權者飯田延太郎氏の手に移り、大正二年十一月第一坑を開坑し大正三年十一月美唄鐵道（當時石狩石炭株式會社にて



美唄本坑選炭場附近



經營大正四年八月美唄鐵道株式會社にて買收すの開通と共に送炭を開始せり

大正四年八月三菱にて之を買收し爾來銳意事業の擴張と設備の改善に努め今日の盛況を見るに至れり  
現在稼行せる坑は第一坑、第二坑、第三坑、堅坑（深さ百七十米突）の四坑及び昭和七年五月堅坑々  
口附近に開鑿せる美唄通洞開坑に着手既に本格的出炭の域に達せり

堅坑は開坑以來日尙淺く目下着々發展の道程にありて今後當坑操業の中心となるべき重要坑にして坑  
内外に亘り機械設備完備し本邦に於ける近代的模範堅坑として定評あり

通洞亦嶄新宏大なる計畫の下に着々進展中にして堅坑と合し老大なる綜合設備となるべし

地質及炭層 地質は第三紀層の下部にして砂岩、頁岩の累層により構成せられ十數層の石炭層を夾有す  
炭層は石狩炭田中層群及下層群に位し、現在主として中層群の本層並に下層群の一部を稼行す、層厚  
は平均本層六尺其他の層は何れも三尺乃至七尺あり

下層群は中層群下數百米突に位する急傾斜群層にして、第二坑より堅坑奥部に向ひ走向變々數千米突  
に亘りて賦在し、鑛量莫大なるのみならず各層共發達良好なり

之等は今後堅坑を中心として漸次開發せらるべく美唄通洞は其第一着手として以上の區域に向つて計  
劃せられたるものなり

炭質及用途

分析成績左の如し

美唄塊炭	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黃	發熱量
美唄中塊炭	二・五%	四二・五%	四九・〇%	六・〇%	〇・三%	七、〇〇〇
美唄粉炭	三・〇%	四一・〇%	四七・〇%	九・〇%	〇・四%	六、一〇〇
美唄二等塊炭	三・〇%	四〇・〇%	四七・〇%	一〇・〇%	〇・四%	六、〇〇〇

不粘結性にして夾雜物少く火付早く發熱力強く加ふるに火持良好等特異の條件に恵まれたる爲陸上並  
に海上一般汽罐用炭として名聲全國に遍く、就中本邦鐵道汽罐燃料、内外汽船燃料等には我國最優良  
炭として不動の地歩を占むるに至り、又窯業用瓦斯發生爐用炭等にも好適し、一面家庭ストーブ用炭  
としては文字通り白熱的好評あり遠く他炭の追隨を許さず

採炭法 主として後退式長壁法を採用し、採炭に長壁式電氣コールカッター、電氣オーガー、空氣  
ポンプチャー・ドリル、コールピツク等を併用し徹底的機械採炭の爲操業全く合理化されたり

排水法 各坑共湧水比較的少量にて第二坑の自然排水を除いては何れも電氣ポンプを備へ排水す

通氣法 第一坑はキヤベル式扇風機、第二坑は自然通風、第三坑はキヤベル式扇風機、堅坑はラト  
ー式扇風機、通洞はシロツコ式扇風機を使用し、サーキラー式又はダイアゴナル式通氣法を行ふ

運搬法 切羽運搬はチエーンコンベヤー、シエイキングコンベヤー等により、片盤坑道は蓄電  
池機關車、メインエンドテール捲又は馬力により、昇卸坑道には電氣捲揚機減速コンベヤーを使用  
す、坑口より選炭場迄の運搬は第一坑は蒸氣機關車、第三坑はエンドレス捲により、第二坑は第一坑  
迄蓄電機關車により搬送せられ第一坑分と合して選炭場に至る、尙堅坑坑底水平坑道は架線式電氣機  
關車を使用し、坑外搬出は上風、下風兩坑共電氣捲揚機により、通洞は坑内外架線式電氣機關車を使  
用す



**選炭法** 本坑選炭場及堅坑選炭場の二選炭場を有し大塊、中塊、粉炭に篩分く、篩目は27以上大塊、27以下17迄中塊、17以下粉炭とし、一日約五千應の選炭能力を有す、本坑選炭場には水洗機を設備し、中塊炭及び粉炭を水洗す

尙各選炭場には**コールビン**あり、石炭收容能力本坑二千應、堅坑二千應なるも目下更に増設中なり

**保安** 坑内乾燥炭塵の危険に對しては切羽撒水、噴霧装置、炭塵掃除、岩粉撒布をなし、坑内照明には主要坑道には定置電燈を設備せる外携帶用として**エヂソンヘッドライト**及**ウルフヘッドライト**を使用せり、尙各坑内見張所には救護用品を備へ外に救護隊の組織ありて最新式**ドレガー**救命器を有し萬一の場合に備ふ

**出炭高** 現在の鑛夫在籍人員約二千七百人、一日出炭高第一坑七百應、第二坑四百應、第三坑七百應、堅坑一千六百應、通洞六百應、合計四千應見當にて現在坑内外設備は年間裕に百四十萬應以上の出炭能力を有す

### ○大夕張礦業所

**位置及面積** 石狩國夕張郡夕張町字大夕張に在り、海拔三一九米に位し、夕張川本流に沿ひ頗る廣潤なる緩傾斜地帯を占む

夕張線清水澤驛より港頭迄の料程は、手宮一四八籽、室蘭一三六籽、函館三一七籽なり

鑛區面積 約一千四百萬坪

鑛業用地面積 約三百五十町歩

**沿革** 明治三十七年頃發見され、大正五年一月三菱の經營に移り、爾來南部大夕張の鑛區を稼行せしが、昭和五年十二月廢坑後は専ら主力を北部大夕張に集中せり

北部新坑は昭和四年六月南大夕張以北の鐵道開通と同時に送炭を開始し今日の坑勢を見るに至れり

**地質及炭層** 地層は下部第三紀層に屬し砂岩及頁岩の互層より成る、炭層は石狩炭田下層群に屬する夕張夾炭層にして東西の横壓力により大褶曲を成し東翼は隆起顛倒して逆層を形成す

稼行目的の炭層三あり、主要炭層の厚さ四・五米乃至五・五米にして夾雜物を含まず、走向は略南北傾斜は一〇度乃至二五度にして層厚層位共に整然たり

**炭質及用途** 炭質は粘結膨脹性にして分析成績左の如し

	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄	發熱量
	%	%	%	%	%	カロリー
大夕張塊炭	一・〇	四四・〇	四六・〇	九・〇	〇・三〇	七、七〇〇
大夕張洗中塊炭	一・〇	四一・〇	四八・五	九・五	〇・三〇	七、六〇〇



大夕張洗粉炭

一・〇 四三・〇 五〇・五 六・五 〇・三〇 七九・五〇

塊炭、洗中塊炭は灰分少く火力強烈内外汽船燃料、其他一般汽罐用炭として名聲噴々たり、洗粉炭は揮發分多く粘結力強大なるのみならず、灰分及硫黄分極めて僅少なるため瓦斯發生用、骸炭製造用に好適し、市場出廻り後幾何ならざるに既に本邦第一級原料炭として一般に其眞價を確認せらるゝに至れり、又高級燃料炭とし頗る賞用せらる

**採炭法** 片磐押長壁法を採用し一切爆薬を使用せず、全部壓氣動コールピツクハンマーに據れり（空氣壓縮機五〇〇馬力四臺）

尚排水は水準下には電氣動唧筒を用ひ、通洞内はコンクリート溝を通じて坑外に排水す

**運搬法** 切羽並に主要坑道迄の運搬はシエーカーコンベヤー、チエーンコンベヤー、ベルトコンベヤー、各種ホイスト逆轉エンドレス等により完全に機械化せり

**通氣、保安** 排氣坑口は毎分七、〇〇〇立方米及一、四〇〇立方米の容量を有する扇風機を設備し通風の萬全を期し、坑内には撒水噴霧、岩粉撒布を行ひて炭塵及瓦斯爆發の絶無を期すると共に萬一の變災に備ふる爲救護班を組織し救命器を常備せり

坑内照明は全部ウルフ・エチソン又は本多式電氣安全燈を使用す

**選炭** 石炭の精選には最新式の選炭機二臺並バウム水洗機二臺（能力毎時二〇〇〇噸）及共益社式水洗機四臺（能力毎時各四〇〇噸）を設備す、其の操業方法は篩目<sup>2</sup>及<sup>1</sup>チンマースクリーンにより塊、中塊及粉に分ち粉炭及中塊炭は凡て水洗してコールピンに移す

選炭能力 一日 二、五〇〇噸

ホケツト收容能力 二、五〇〇噸

未選炭貯炭場は約二五、〇〇〇噸の收容力を有す  
尙引續きチンマースクリーン及バンドコンベヤー増設の豫定なり

出炭高及鑛夫數

現在一日出炭高 二、〇〇〇噸

在籍鑛夫數 一、三六〇名

前記の如く炭層炭質共に優良、設備亦完全せるを以て現在と雖も年額七五萬噸程度の出炭能力を有し將來は年額一〇〇萬噸にも達せしむる豫定なり

大夕張骸炭

當所産炭は極めて骸炭原料に好適し單味にて能く良質の骸炭を製出し得るが故に附屬事業として大正七年南大夕張にビーハイヴ窯五十二基を設置し、鑄物、鍛冶、家庭用として優秀なる各種の骸炭を製造しつゝありしが昭和九、十兩年に亘り北部大夕張に新に八十六基を



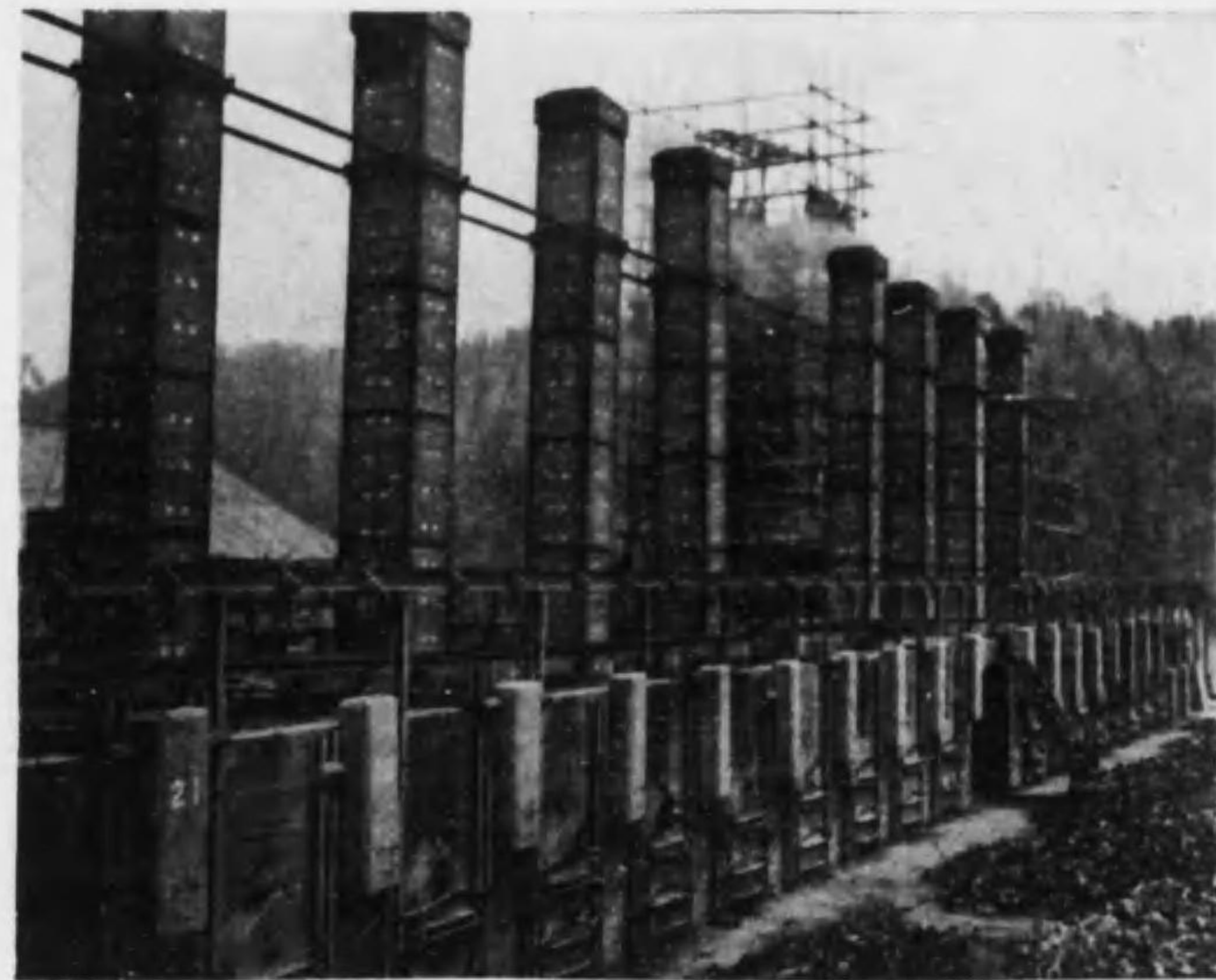
大夕張礦業所全景



増設し月産額併せて約三、〇〇〇噸を製出す  
 骸炭種別及分析成績左の如し

	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黃	發熱量
	%	%	%	%	%	カロリー
撰上製	0.2	1.3	89.0	9.5	0.30	7,300
上製	0.5	1.5	87.5	10.5	0.30	7,100
A號	0.5	1.5	87.5	10.5	0.30	7,100
上製乙號	0.5	1.5	86.5	12.5	0.35	7,000
丙號	1.0	2.0	84.0	13.0	0.40	6,800

**専用鐵道** 北部開發と共に從來清水澤南大夕張間の専用鐵道を通洞口迄延長し昭和四年六月より全線を通じ自營運輸をなし専ら石炭、骸炭、木材、其他諸物資の輸送並に坑所出入者の便に供せり、軌幅三呎六吋、省線清水澤より延長一七・四軒なり  
 尙夕張沿線其他周圍の發展に伴ひ一般の便益に資する爲地方鐵道に改組連帶運輸を行ふ可く手續中なり



大夕張礦業所北部骸炭爐

雄別炭礦鐵道株式會社

○雄別礦業所

位置及鑛區面積並に交通其他

炭礦は釧路國阿寒郡舌辛村に在り釧北國境に聳ゆる阿寒山の南麓より發する舌辛川の上流に位置し鑛區面積は探掘試掘合せて約壹千萬坪を有す而して根室本線釧路驛より坑所雄別炭山驛迄四十四軒（外に大祥内迄約三軒炭山驛側線延長）は自社經營の私設鐵道を敷設し省線と連絡設備をなし貨客の連帶輸送をなせり

**沿革** 往年山縣勇三郎氏の試掘鑛區なりしが失權後轉々として大正七年十二月芝義太郎、宗像政藏兩氏の得たる試掘十五鑛區を以て北海炭礦鐵道株式會社を設立し爾來同社の手により鐵道工事並に開坑作業を行ひ大正十二年一月鐵道の開通と共に運炭を開始せり  
 大正十三年三月現在の雄別炭礦鐵道株式會社と



雄別炭山驛方面



改稱し同時に其産出炭全部の販賣を三菱鑛業株式會社に委託し經營今日に至る  
 地質及炭層 下部第三紀層にして主として砂岩、頁岩、蠟岩より成り多量の化石を含有す、夾有炭層數  
 多きも主なるものは徹別層（四尺）上層（六尺乃至十尺）本層（六尺乃至八尺）最下層（四尺）の四  
 層にして目下採炭中の炭層は本層、傾斜は二十五度乃至三十二度なり

炭質及用途

分析成績左の通り

	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄	發熱量
雄別塊炭	3.0%	44.5%	41.0%	2.5%	0.2%	6,750
雄別洗中塊炭	3.0%	44.5%	39.5%	3.0%	0.2%	6,600
雄別洗粉炭	3.0%	44.5%	40.0%	3.5%	0.2%	6,650
雄別二號塊炭	3.0%	40.0%	37.0%	3.0%	0.2%	5,800

揮發分の含有比較的多量にて質堅硬、火付極めて早く、長焰にて熱力高く、硫黄分、灰分共に少き不  
 粘結性の石炭なり、釧路炭田産炭中の最優良炭にして陸上及海上一般汽罐用、窯業用に好適なるが殊  
 に塊炭、洗中塊炭は家事用炭、特にストーブ用炭として好評あり、粉炭も亦工場ボイラー用、汽船焚  
 料、製糸家用炭に好適し筑豊、常磐、宇部等と角逐して就中京濱方面に廣汎なる販路を開拓するに至  
 り

採炭法 長壁式にして最新式サリバンコールカッターにより下透を行ひシーメンスコールオーガー  
 により穿孔發破をなすものと、地壓を利用して自然力に依り石炭を壓出せしめて採掘するものとあり

排水法 電氣唧筒により排水を行ふ

通氣法 容量拾五萬立方呎のシロツコ式主要扇風機を使用して機械通風をなす

運搬法 切羽は鐵槌、片磐坑道はテールロープ捲により運搬し、斜坑は一坑三百馬力二臺及二百馬  
 力一臺、二坑三百馬力二臺の各電氣捲揚機にて主要坑道迄捲揚げ共に自重十應の電氣機關車に依り通  
 洞を経て坑外へ搬出す

尙従業者運搬のため電車にて索引する人車及斜坑二百馬力人車を有するも近々斜坑用四百馬力人車完  
 成の豫定なり

選炭法 選炭場は篩目2吋のチンマースクリーンにより塊炭を篩上げ2吋以下の中塊及粉炭の混合  
 原炭は容量六〇應のパウム式洗炭機により洗炭後中塊及粉炭に選別す

選炭能力一日約千五百應、洗炭能力千二百應なり、選炭場に附屬せるコールピン容量は合計七二〇應  
 なり

出炭高 礦夫在籍約千二百五十人外に鐵道並に釧路勤務の稼働者九十余名在り、現在一日出炭高一  
 坑約六百應、二坑約五百應、錦澤約二百應、合計千三百應なるも年産四十萬應以上出炭能力を有し、  
 近く五十萬應を出炭する豫定なり



〇尺別炭坑

位置及鑛區面積並に交通 炭礦は釧路國白糠郡音別村に在り鑛區面積は採掘試掘合せて一千萬余坪を有す、根幹本線尺別驛附近を流るゝ尺別川に沿ふて上ること約一一、七軒にして炭礦所在地に達す、此間輕便鐵道を敷設し石炭其他貨物を輸送す

省線尺別驛構内に約二千五百坪の貯炭場の設けあり一萬五千噸の貯炭能力なり

沿革 明治四十三年八月田村耕氏鑛業權を設定せるも開坑するに至らず、大正七年十月椎葉紉義氏之を讓受け開坑に着手し、大正八年四月北日本鑛業株式會社の經營に移り、昭和三年十月雄別炭礦鐵道株式會社之を讓受け、同時に販賣を三菱鑛業株式會社に委託す

地質及炭層 地質は上部第三紀層の頁岩、砂岩、蠟岩の五層にして炭層の上部より二尺、板五尺、五尺三尺、四尺、十二尺の六層あり、其内最下層の十二尺層と其上の四尺層は炭質最も優良なるを以て此の兩者を採炭す

傾斜は二十三度乃至三十度なり  
炭質及用途 分析成績左の通り

尺別塊炭	尺別洗小塊炭	尺別洗粉炭	水分 %	揮發分 %	固定炭素 %	灰分 %	硫黃 %	發熱量 カロリー
七・五	七・五	七・五	三・五	三三・五	四八・〇	九・〇	〇・三〇	六、三〇〇
七・五	七・五	七・五	三・五	三三・〇	四三・五	一五・〇	〇・三〇	五、九〇〇
七・五	七・五	七・五	三・五	三三・〇	四三・五	一五・〇	〇・三〇	五、九〇〇

硬度中庸、火付早く短焔にして熱力高く、硫黃分、灰分共に少き不粘結性半無煙炭にして一般家庭用炭として愛用され更に海陸ポイラー用炭殊に道内諸工場、鐵道等に於て好評を博し、釧路炭田中の優良炭として雄別炭と並び稱せらる

採炭法 長壁式前進追掛二段拂による

排水法 十二尺斜坑は捲卸殘柱退却拂にて排水せず、奈多内坑は水準以上にて自然排水を行ふ

通氣法 十二尺斜坑は容量四萬立方呎シロツコ式扇風機にて通風を行ひ、奈多内坑奥澤坑は自然通風なり

運搬法 切羽は鐵槌流しに依り坑道は馬送、十二尺斜坑は蒸汽捲揚機にて捲揚げ、十二尺斜坑と選炭場間は延長約壹軒の索道により、奈多内坑はメーソール捲機にて選炭場へ運搬す

選炭法 四尺層斜坑々口附近に選炭場二棟を設け六分目固定バースクリンにより塊炭、粉



尺別炭山索道並選炭場



炭に分ち、塊炭は手選法により磐石を除き精炭とす、粉炭は水洗場に送り共益社二十五匁水洗機にて洗上げ、一寸角目**トロンメル**にて小塊炭と粉炭に篩分けらる、選炭能力一日二百五十匁、洗炭能力一日百五十匁なり

**動力** 奈多内、奥澤坑の開発と共に坑内外諸設備を改善、従來の蒸汽動力を電化せり

**出炭高** 現在稼行坑口は十二尺斜坑及奈多内坑の二坑にして鑛夫在籍約二百七十人、一日出炭約三百匁なるも年間十五萬匁の出炭能力を有す

### 雄別炭鑛鐵道株式會社

## ○ 浦 幌 炭 坑

**位置及鑛區面積並に交通** 鑛區は十勝國十勝郡浦幌村及釧路國白糠郡普別村に跨り主として浦幌川支流常室川の流域を占め東南方は吾が尺別炭田に相接す

鑛區面積は採掘試掘を合せて貳千壹百八拾萬坪に及べり

根室線浦幌驛より中常室に至る八軒は國道にして之れより約七軒は村道よりなり、而して約六軒の炭鑛専用道路を以て浦幌炭鑛に通ず、現在石炭其他の貨物の輸送は總て貨物自動車に依るも近く空中索道に依り吾が尺別炭坑を経て尺別驛に送炭し、又一般交通には乗合自動車と貨物自動車を利用することとす

**沿革** 浦幌炭田中優良なる七鑛區は元古河鑛業株式會社の所有なりしも、大正二年大和鑛業株式會社々長平林甚輔氏の手に移り同六年末より約五ヶ年間専ら露頭の探究に努め昭和八年八月より開坑經營せるも幾何の出炭を見ずして、同十一年十月雄別炭鑛鐵道株式會社之が譲り受けをなすと共に三菱鑛業株式會社に產出炭の販賣を委託經營するに至れり

炭鑛は開坑以來日尙淺きも目下着々發展の道程にあり、近く本格的出炭の域に達せんとす

**地質及炭層** 地質は下部第三紀層にして砂岩、頁岩、礫岩の累層により構成せられ、炭層は數多きも主なるものは一番層（二尺乃至三尺）二番層（三尺乃至四尺）三番層（三尺乃至五尺）**オサツブ層**（三尺乃至十五尺）**ルシン層**（二尺乃至五尺）にして、現在稼行中のものは二番層、**オサツブ層**の兩層に



して、三番層の炭質最も優良なり、走向は大體南北にして傾斜は東三〇度乃至六〇度なり  
炭質及用途 分析成績左の如し

	水分	揮發分	固定炭素	灰分	硫黄	發熱量
塊炭	八・四〇	四三・六〇	四三・九〇	四・九〇	〇・五	六、七〇〇
洗中炭	八・〇〇	四四・三〇	四二・〇〇	六・七〇	〇・五	六、六〇〇
洗粉炭	八・五〇	四〇・〇〇	三九・六〇	二・九〇	〇・三	六、二〇〇

揮發分の含有量多くして灰分少く、長焰にして熱力高く、火付極めて早き不粘結性の石炭なり、釧路炭田産炭中雄別炭と並び最優良炭にして海陸一般汽罐用に適し、特に塊炭、中塊炭は一般家事用、ストープ用炭として頗る賞用せらる

**採炭法** 長壁式採炭にして壓氣動コールビットクハンマーに依り採掘す

**排水法** 現在蒸気ポンプに依るも近く電氣ポンプに變更の豫定なり

**通氣法** 容量四萬立方呎シロツコ式扇風機設置中なり

**運搬法** 現在切羽は鐵桶流し、坑道は手押、斜坑は十四吋蒸汽捲揚機械、坑口選炭場間馬送に依るも、本年中に坑道はメインテイルロープ、斜坑は三〇〇馬力電氣捲、坑口選炭場間はエンドレスに取り替へ準備中なり

**選炭法** 選炭は時及一吋のヂンマースクリーンにより塊、中塊、粉に篩ひ分ち、塊炭はビットキンダバンドに依り手選し、中塊、粉炭は夫々容量一〇應のジツガーに依り水洗を行ふ、尙ジツガーを三五應共益社水洗機に取替へ工事中なり

**輸送法** 山許、省線浦幌驛間の輸送は現在貨物自動車十六臺に依り浦幌驛へ送炭せるも輸送能力不足の爲山許尺別炭坑間六軒の空中索道架設工事中にして完成の後は兩者に依りて輸送の豫定なり  
**出炭高** 鑛夫在籍者約二百五十名にして現在一日出炭高約三百應餘なれども設備の進捗と共に増産し十二年度十二萬應、十三年度二十萬應送炭の豫定なり



雄別炭礦鐵道株式會社

## ○茂尻礦業所

位置及鑛區面積並に交通其他

當炭礦の鑛區は石狩國空知郡赤平村、芦別村、歌志内村に跨り、礦業所は根室本線茂尻驛の東方市街地に接續して工場、住宅等本線を挟みて點在、交通至便、炭礦としては殆ど比類なき地の利を占め、小樽港へ一三五・七籽、留萌港へ九五・四籽、室蘭港へ二〇〇・三籽、函館港へは三八一・七籽を夫々距る

鑛區面積三、〇七五、八四五坪にして、外に接續して試掘二鑛區面積約一、二八〇、〇〇〇坪を有す

沿革 本礦は明治四十年頃より大倉喜八郎男の所有なりしが、大正五年始めて炭層の調査を行ひ、同七年一月大倉礦業株式會社の設立と共に其の權利一切の讓渡を受け、同年七月事業



茂尻炭山坑外全景

を創め着々坑内外の施設を整備し業態漸く順調に趨ひしが、昭和十年七月雄別炭礦鐵道株式會社之を讓受け坑内外の設備を改善し將來の發展に邁進しつゝあり

地質及炭層 地質は第三紀層に屬する砂岩、頁岩、礫岩及泥灰岩等互層より成り、炭層は空知炭田中の上層群、中層群、下層群の全部を包含し、走向は略南北にして東に傾斜するも褶曲をなす部分に於ては往々逆傾斜をなすことあり、傾斜は北部にては二十度乃至五十度なるも南部に至るに従ひ五十度乃至八十度に及ぶ

炭質及用途 炭層により多少其品質を異にすと雖も概して粘結、膨脹性強き高度の瀝青炭にして、火力強烈殊に硫黄分少きを以て製鐵用に愛用せられ、骸炭及瓦斯發生原料炭としても一般に歡迎せらる、成分左の如し

炭種	水分 %	揮發分 %	固定炭素 %	灰分 %	硫黄 %	發熱量 カロリー
塊炭	一・五	三九・〇	五二・五	八・〇	〇・三	七、五〇〇
中塊	一・五	三九・〇	五二・五	八・〇	〇・四〇	七、六〇〇
A洗粉	一・七	三九・五	五二・八	七・〇	〇・三〇	七、六〇〇
B洗粉	一・七	三九・〇	五二・三	八・〇	〇・四〇	七、五〇〇
二洗塊	一・七	三八・〇	五二・三	九・〇	〇・四〇	七、四〇〇
塊	二・〇	三六・〇	四七・〇	一五・〇	〇・四五	六、七〇〇

採炭法 炭層賦存上桂本坑、同二坑、萬慶坑の三坑口によりて稼行し、採炭法は炭層の狀況により前進或は後退の斜昇向長壁式を採用し、採掘跡は完全充填をなす、而して瓦斯發生の虞ある炭層に於



てはコールピツクを使用し、然らざる所に在りては發破採炭をなす

**排水法** 坑口水準線以上の採掘中なる桂二坑は自然排水をなし、他は何れも電動タービンポンプにて排水を行ふ

**通氣法** 各坑に容量一、〇〇〇乃至二、〇〇〇立方メートルのシロツコ型扇風機を使用機械通風をなし、必要に應じ局部扇風機を使用す

**運搬法** 切羽運搬は急傾斜層にありては充填面の自然流下により、緩傾斜にては鐵桶によりて積込口に流下せしめ炭車に積載をなし、片磐運搬法はエンドレス、テールローフ或は馬匹により捲立迄運送し、桂本坑にては坑口に五百馬力複胴電捲により、萬慶坑は百五十馬力單胴電捲により選炭機水準線に捲揚ぐ、桂二坑々内及坑外は架線式電車によりて選炭場に送る

**選炭法** 選炭場に運ばれたる粗炭はカーブラー及チフラーに依りて容量三〇〇噸の粗炭槽に入りエロンファイターを経て逐次選炭機に給炭す

選炭機はローラーグリズリーに依り3<sup>φ</sup>以上と3<sup>φ</sup>以下に篩分け、3<sup>φ</sup>以上は手選帯にて手選し一等塊、二等塊及捨石に分級し、3<sup>φ</sup>以下は三槽式パウム水洗機二臺に誘導し精洗の後ジンマー式スクリーンにて塊(3<sup>φ</sup>1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>)中塊(1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>)洗粉(1<sup>1</sup>/<sub>2</sub>以下)に分級す

選炭能力一日一、五〇〇噸、洗炭能力一日一、二〇〇噸にして、貯炭庫容量は一、五〇〇噸なり  
鑛夫數及出炭高 現在鑛夫數坑内外合せて約一、二〇〇名

現在出炭高は日産桂本坑五〇〇噸、桂二坑二〇〇噸、萬慶坑三〇〇噸、合計約一、〇〇〇噸なるも、年産優に五〇〇、〇〇〇噸の出炭能力を有す

### ○小樽港

當地に當社支店を置き北海道産出炭販賣及積出の元扱をなし且小樽築港驛並に手宮驛構内に現務係事務所を置き石炭積出荷役の衝に當らしむ  
年間扱高次の如し(昭和十一年中実績)

着炭高	六九、五〇〇噸
拂出高	三三、〇〇〇噸
内 譯	
内國移送高	四一、四〇〇噸
道内移送高	二、二〇〇噸
外國輸出高	八、六〇〇噸
汽船燃料	二六、九〇〇噸
地 許 賣	四、九〇〇噸

當地に於ける當社並に鐵道省石炭積込設備概要は左記の通り

#### ○當社荷役設備

一、貯炭場



小樽港鐵道省營石炭積込上海棧橋



	面積	貯炭能力
手宮驛構内貯炭場	二、八五〇平方米	六三、〇〇〇噸
築港一號貯炭場	一四、七二〇平方米	五三、〇〇〇噸
築港二號貯炭場	四、三〇〇平方米	一五、〇〇〇噸
計	四三、八七〇平方米	一三一、〇〇〇噸

右の内築港二號貯炭場は昭和十二年末頃荷役設備完成の上使用開始の豫定  
 二、貯積地下隧道式ベルトコンベヤー及ローダー

手宮貯炭場地内に各二基あり  
 延長 海岸より地上高架棧橋に沿ひ三六〇呎及二七〇呎

貯積作業能力 二基一時間 二五〇噸

(コンベヤー奥部末端に貨車積コンベヤー一基あり 能力一時間九〇噸)

右手宮貯炭場並に積込設備は築港貯炭場完成に伴ひ漸次築港へ移轉の豫定なり

三、船

五〇噸乃至二二〇噸積各種 一六隻 積載能力 一、五〇〇噸

四、曳船用小蒸汽船 二隻

五、一日沖積込作業能力 約二、〇〇〇噸なり

○鐵道省積込設備

道外積出炭積込設備として從來使用し來りたる手宮高架棧橋(木造ドレツスル型高架式、長さ三九七米、高さ一九米、繫船能力三―四千噸型四隻、一日積込能力四千噸)は近年腐朽甚だしきを加へ、旁

々當地積出數量逐次増勢の實情に鑑み、鐵道省に於ては去る昭和三年五月以降新積込設備に着工、此程右第一期工事(前期)大部分完成を見たり  
 右鐵道省營石炭水陸連絡設備大要左記の通りなり

昭和三年五月着工 同十二年竣工 工費 約七〇〇萬圓

年間積出計畫數量 二、五〇〇、〇〇〇噸

貯炭場面積 六三、三六〇平方米 貯炭能力 二二〇、〇〇〇噸

貨車積及船小型船岸積用

フリツチトランスポーター 二基 (一基一時間最大能力 三〇〇噸)

船積用海上棧橋

ベルトコンベヤー及ローダー 各二基 (一基一時間最大能力 八〇〇噸)

棧橋長さ 一四四米 六、〇〇〇噸級汽船二隻同時繫船可能

船直積棧橋

昭和十二年八月頃迄にホツパー及直積シュート各二個取付の豫定

右完成の上は船二隻同時積込むことを得



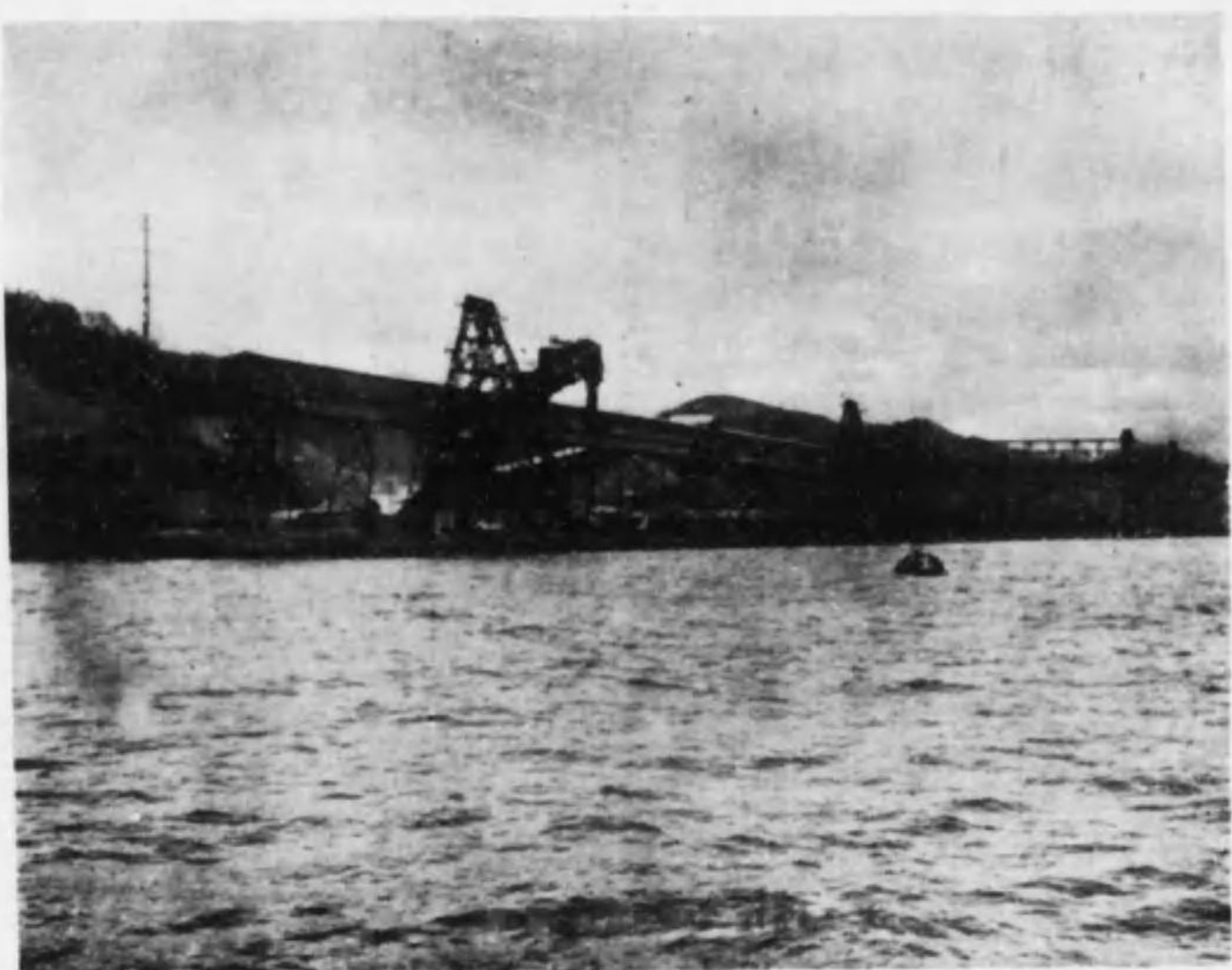
## ○室蘭港

大夕張炭の主要積出港にして当社海陸荷役設備は左の通り

貯炭場	面積	貯炭能力
東部鐵道用地内	一號 三、五〇〇平米 二號 九、七〇〇平米	一〇、五〇〇噸
西部鐵道用地内	五、九〇〇平米 一〇、〇〇〇平米	一〇、〇〇〇噸
計	一九、一〇〇平米	四九、七〇〇噸
移動式ベルトコンベヤー	三 臺	
舢舨 九 隻	積載能力 六〇〇噸	
曳舢用小蒸汽船 一隻		
沖積作業能力 一日	約一、〇〇〇噸	

### ○現在の設備

貯炭場	面積	貯炭能力
一號	四、九〇〇平米	一號 一九、四〇〇平米
二號	三、五〇〇平米	二號 三、五〇〇平米
一號	二五、六〇〇噸	一號 五八、〇〇〇噸
二號	六七、六〇〇噸	二號 六七、六〇〇噸



備設込積炭石營省道鐵港蘭室

### フリッチトランスポーター (貨車積及舢舨積用)

ローダー (汽船積用)

三基	公稱能力 一基一時間 三〇〇噸
二基	公稱能力 一基一時間 六〇〇噸
繫船能力 六千噸級 同時二隻	

### ○將來の計畫

貯炭場 面積 一九、七〇〇平米 (三號貯炭場)  
フリッチトランスポーター (貨車積及舢舨積用) 三基  
ローダー (汽船積用) 二基

公稱能力 一基一時間 三〇〇噸
公稱能力 一基一時間 六〇〇噸
繫船能力 六千噸級 同時二隻

當社は當地に出張所を置き扱炭の積出荷役の術に當らしむ年間扱高次の如し (昭和十一年実績)

着炭	高	扱出	高
内 國 移 送	高	内 國 移 送	高
道 内 移 送	高	道 内 移 送	高
外 國 輸 出	高	外 國 輸 出	高
汽 船 焚 料	賣	汽 船 焚 料	賣
地 許	賣	地 許	賣

### ○荷役方法

荷物炭 道外並に海外移輸出炭は前記鐵道省營ローダーを使用接岸荷役をなす  
焚料炭 汽船焚料炭は前記當社曳舢用小蒸汽船及舢舨を以て沖荷役をなす



## ○ 釧 路 港

釧路川に沿ひ延長三二〇間七千五百坪の雄別炭礦鐵道株式會社貯炭場あり、約五萬噸の收容能力を有す

同社海陸聯絡設備としては曳船用小蒸汽船及發動機船五隻並に總積載能力一、三〇〇噸を有する舢船二五隻を有し、一日約一、七〇〇噸の川筋輸送並に海上荷役をなす

雄別、尺別、浦幌各炭年間釧路積出高次の如し  
(昭和十一年中実績)

着炭高	二七、九〇〇噸
拂出高	二五、七〇〇噸
内 譯	二四一、二〇〇噸
汽船焚料	三、六〇〇噸
地 許 賣	一、〇〇〇噸

當社は當地に出張員を派し同地方の賣炭取扱並に荷役の監督をなさしむ



新釧路貯炭場陸下狀景

## ○ 留 萌 港

茂尻炭は主として當地を經由道外各方面に積出され當港は本邦に類例なき外、内、副港の三段式港灣體系を有す

外港被覆面積	三五、〇〇〇坪	水深	六尺
内港 同上	六、〇〇〇坪	同	六尺
副港 同上	三〇、〇〇〇坪	同	三尺

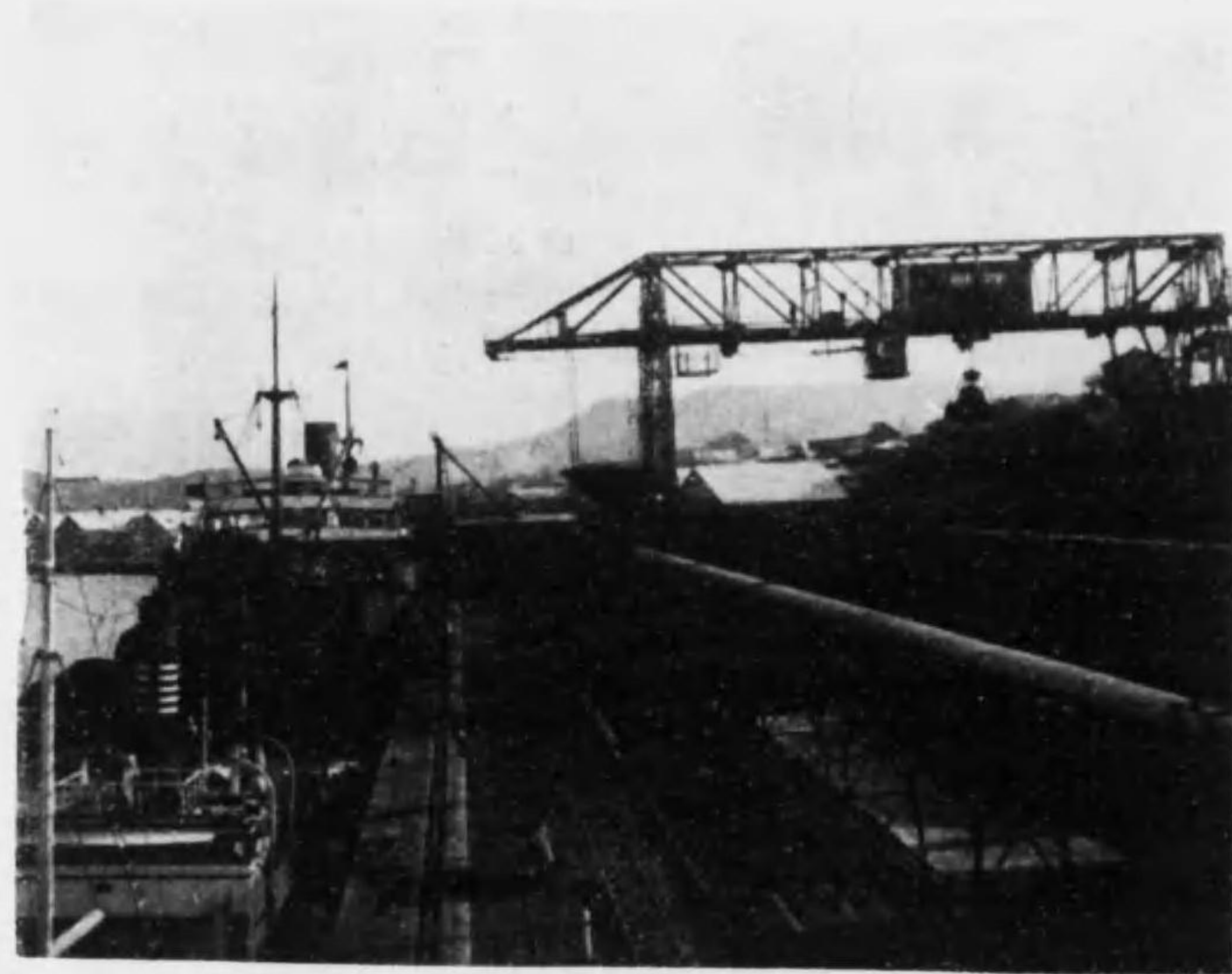
當社は此地に出張員を置き道外積出炭、汽船焚料炭の受渡、地許賣炭事務を取扱ふ

年間扱高左の通り(昭和十一年実績)

着炭高	九五、五〇〇噸
拂出高	八四、二〇〇噸
内 譯	七三、二〇〇噸
汽船焚料	一〇、六〇〇噸
地 許 賣	一〇〇噸

### 荷役設備

接岸荷役用として貯炭場内に留萌鐵道株式會社所有石炭積込機械設備あり、又沖積用として荷



留萌港石炭積込設備



役請負人所有曳船發動機船並舢舨の設備あり

一、荷役方法

道外積出炭は接岸機械積、接岸人夫積、沖積に依る、汽船焚料炭は接岸人夫積、沖積に依る

二、一日積込能力(十時間作業)

接岸機械積 一、七〇〇噸 接岸人夫積 一、〇〇〇噸 沖積 八〇〇噸

三、當社貯炭場

南岸 (留萌鐵道用地内)	四八〇坪	貯炭能力	四、八〇〇噸
北岸 (同 上)	三、八五〇坪	同 上	一、九、二〇〇噸
計	四、三三〇坪		一、四、〇〇〇噸

四、留萌鐵道株式會社荷役機械施設

A 南岸設備

陸上高架棧橋(石炭取卸用) 鐵筋コンクリート製 高 二五呎 全長 一、二六〇呎

石炭積込機

イ、トランスポーター 一基 公稱能力 一時間 二〇〇噸

(ロープロロー式三履クランプ付)

ロ、ローダー 一基 公稱能力 一時間 二〇〇噸

ハ、スチール、ベルト 巾 八〇〇耗 長 二五〇米

B 北岸設備

陸上高架棧橋(石炭取卸用) 鐵筋コンクリート製 高 三〇呎 全長 一、四〇〇呎

石炭積込機 將來建設豫定

### 三菱鑛業株式會社小樽支店

北海道小樽市色内町八丁目三番地

(各地販賣店)

#### 三菱鑛業株式會社

東京、横濱、清水、新潟、伏木、敦賀、仙臺  
青森、船川、酒田、大湊、室蘭、函館、札幌  
釧路、留萌、若松、門司、崎戸、長崎、京城

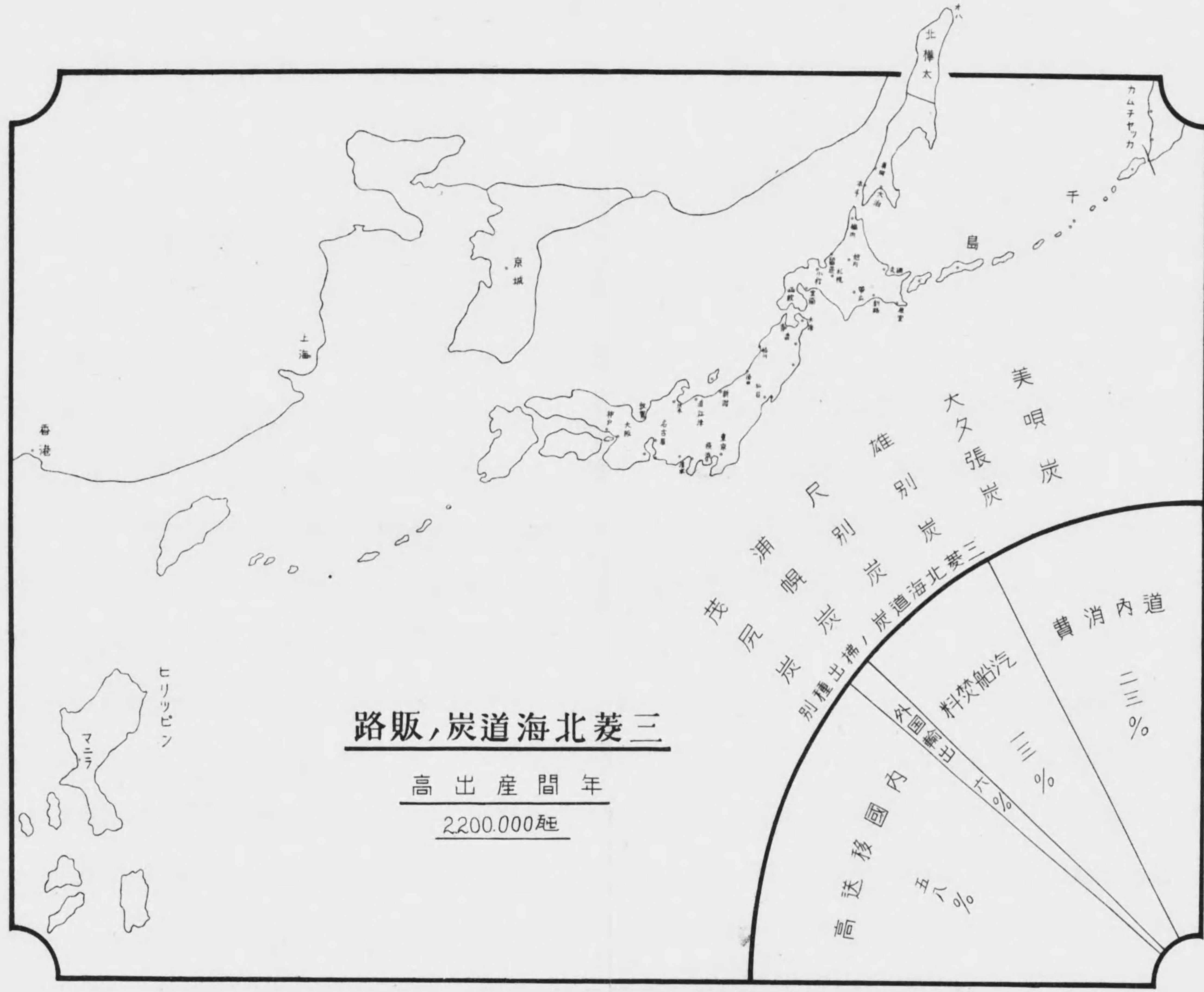
#### 三菱商事株式會社

名古屋、半田、大阪、神戸、岡山、尾道  
吳、佐世保、京城、基隆、高雄、大連  
天津、青島、上海、漢口、香港、新嘉坡  
倫敦、紐育、伯林、其他









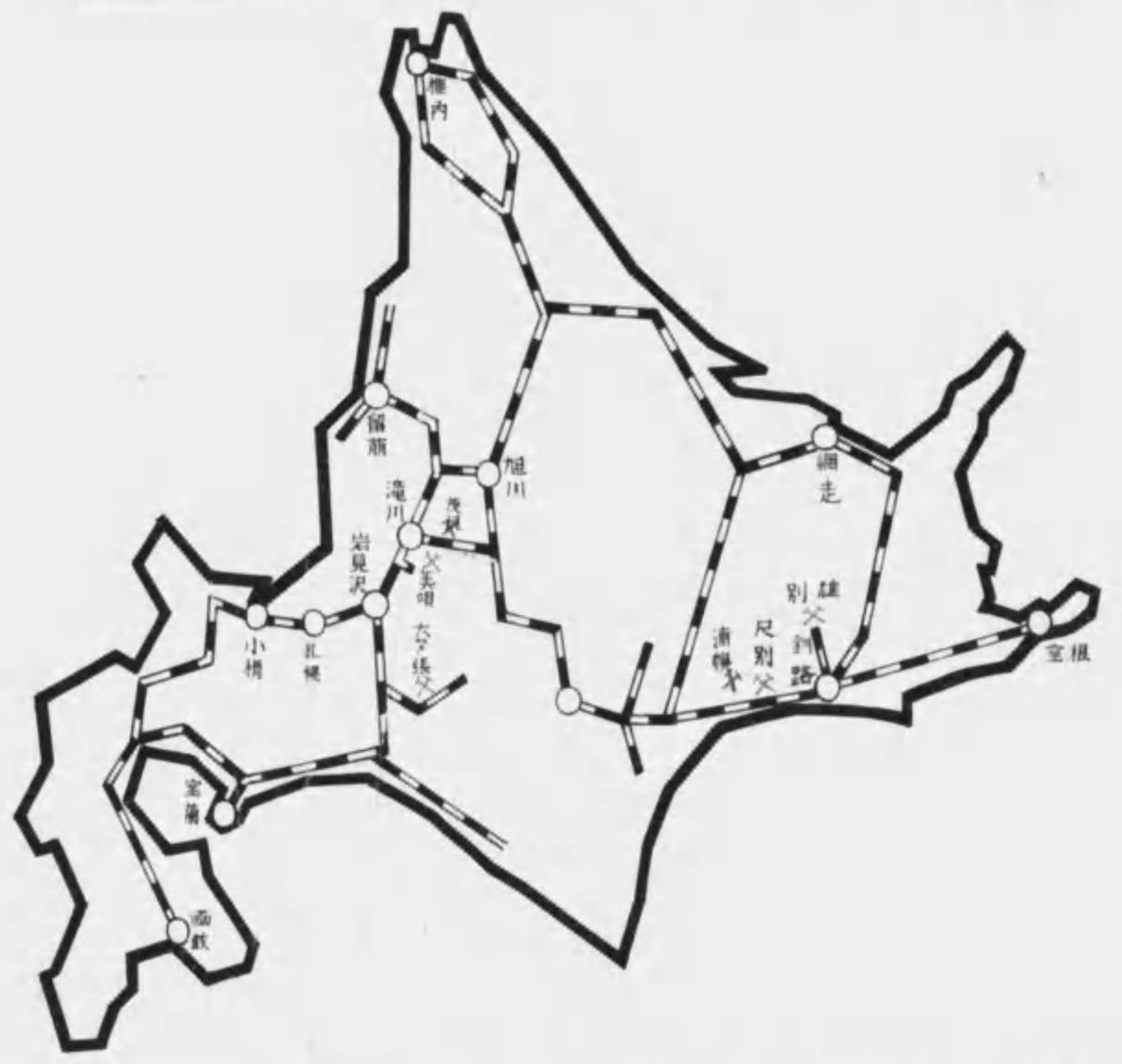
路販,炭道海北菱三

高出産間年  
2200.000 吨

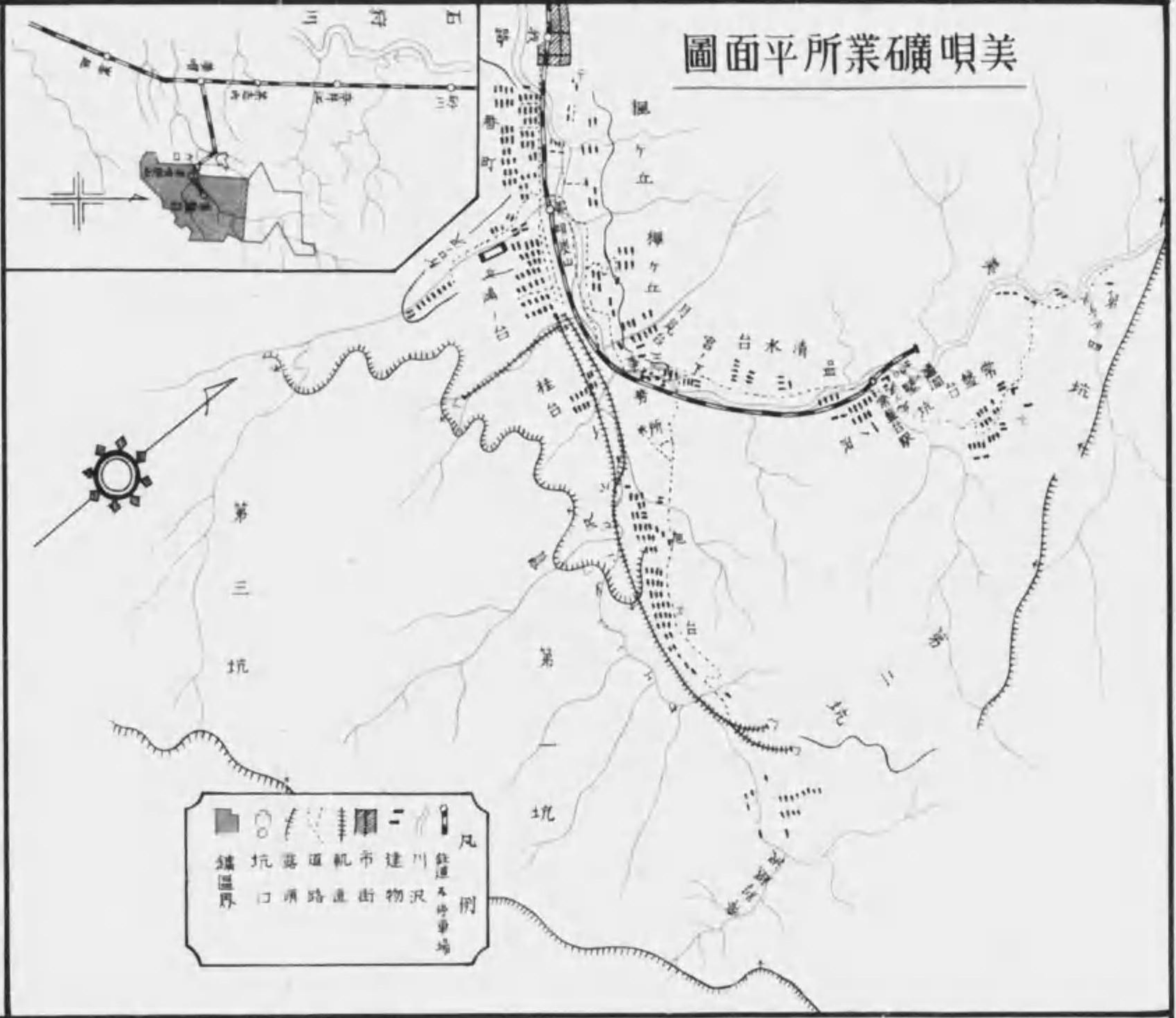
美 唄 炭  
大 夕 張 炭  
雄 別 炭  
尺 別 炭  
浦 幌 炭  
茂 尻 炭  
別 種 出 掃 / 炭 道 海 北 菱 三  
汽 船 燃 料  
外 國 輸 出  
内 道 消 費  
5%  
6%  
23%



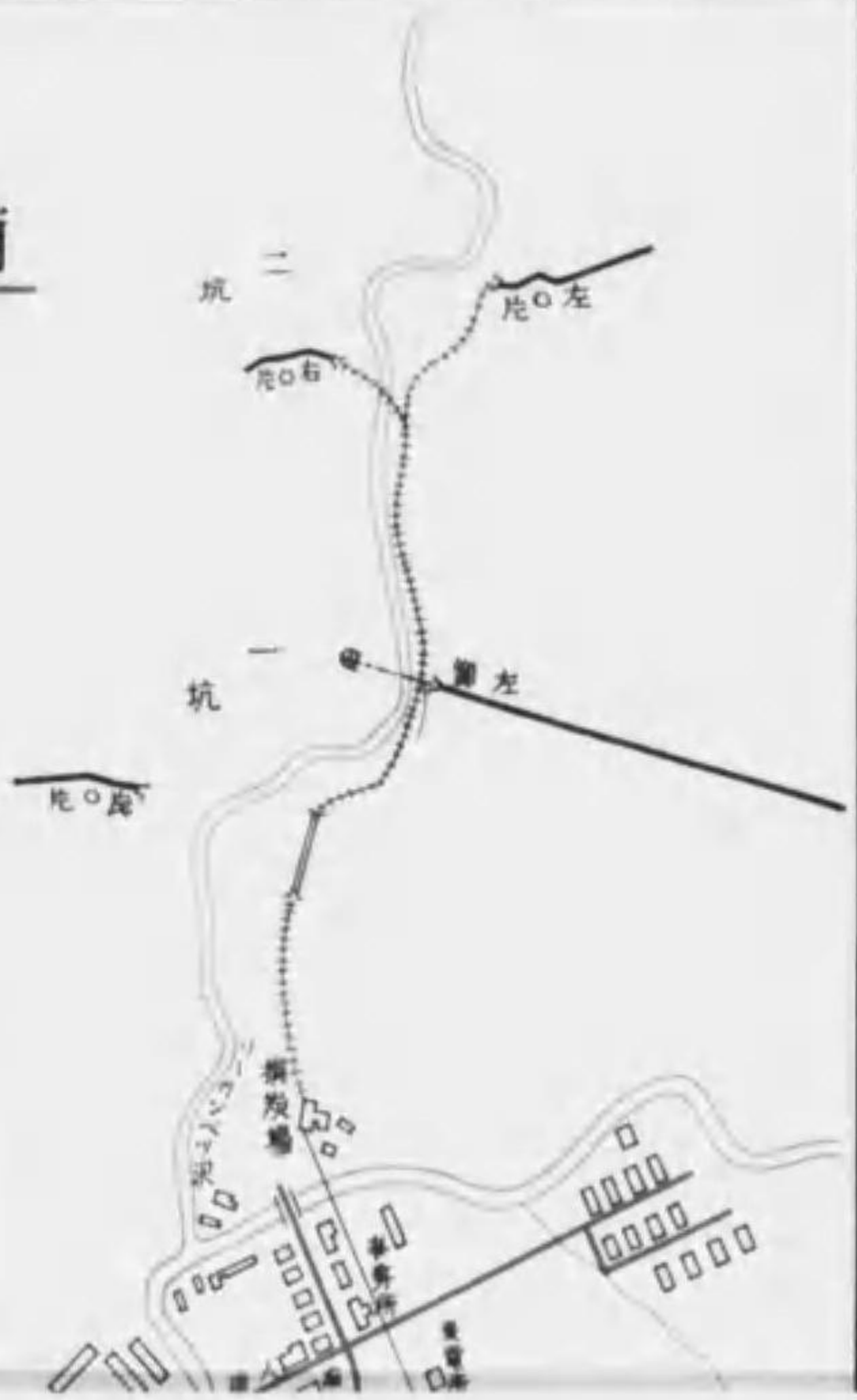
圖略ト置位在所坑炭、菱三ノ於道海北



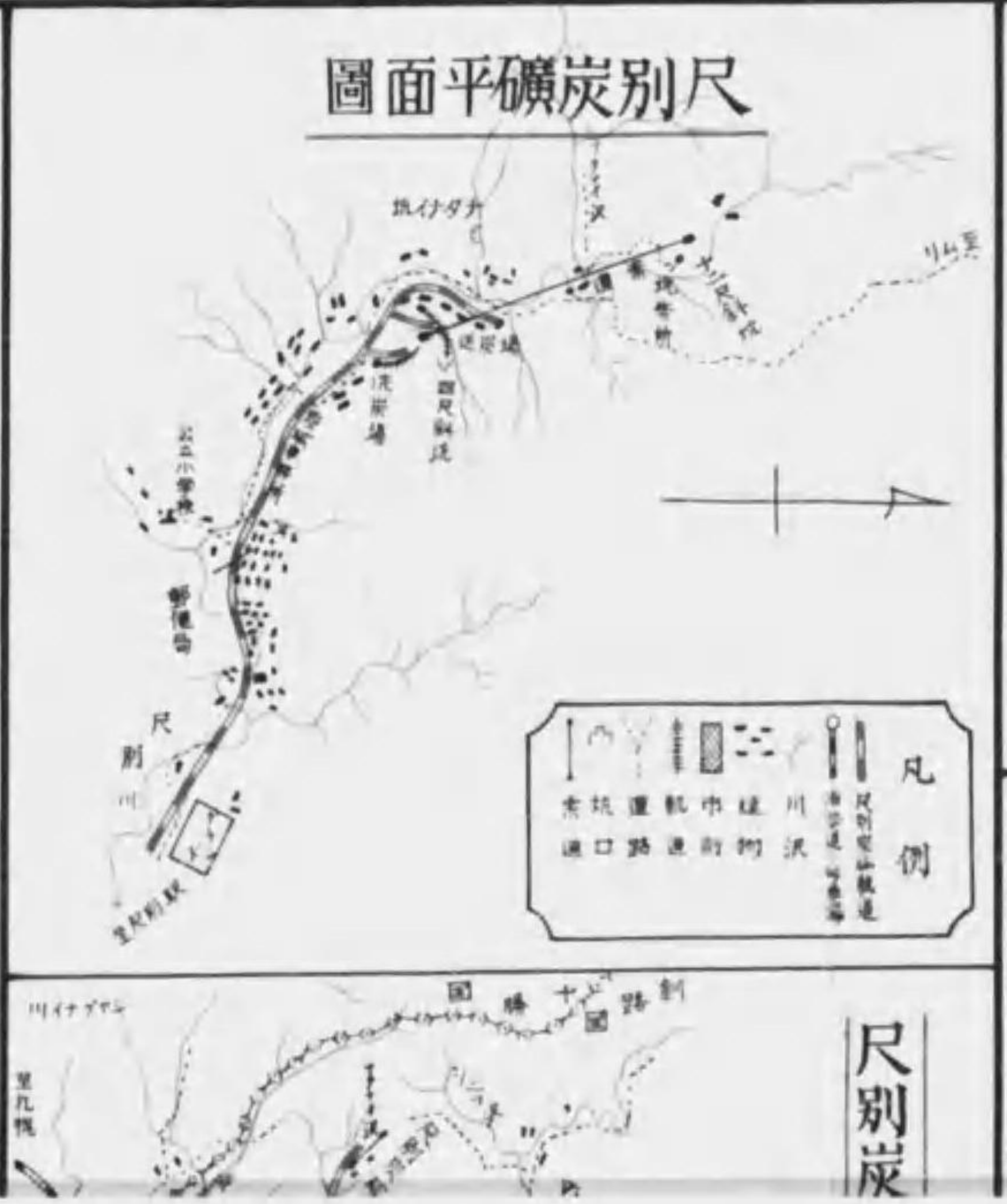
圖面平所業礦美



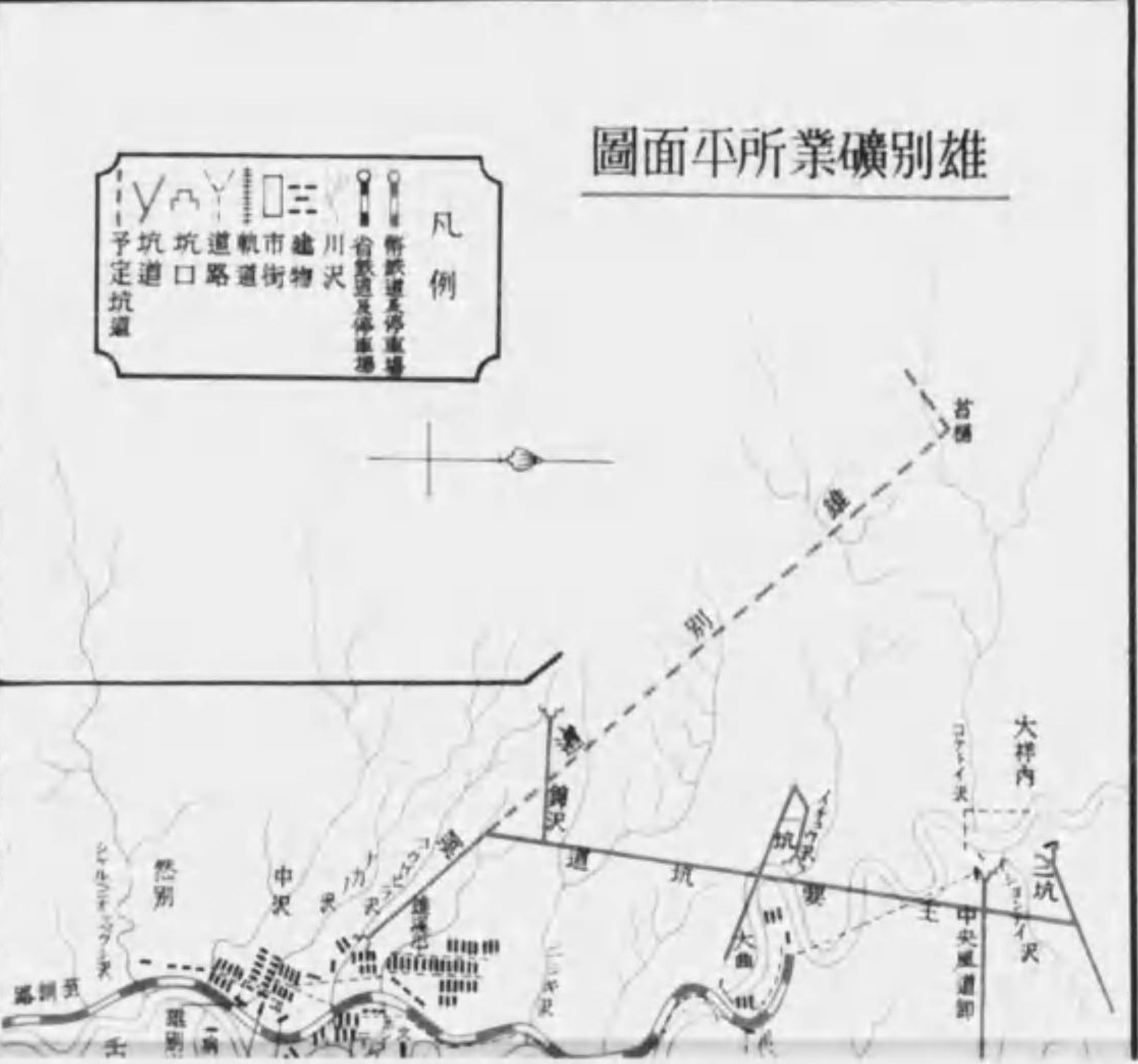
圖面平礦炭幌浦



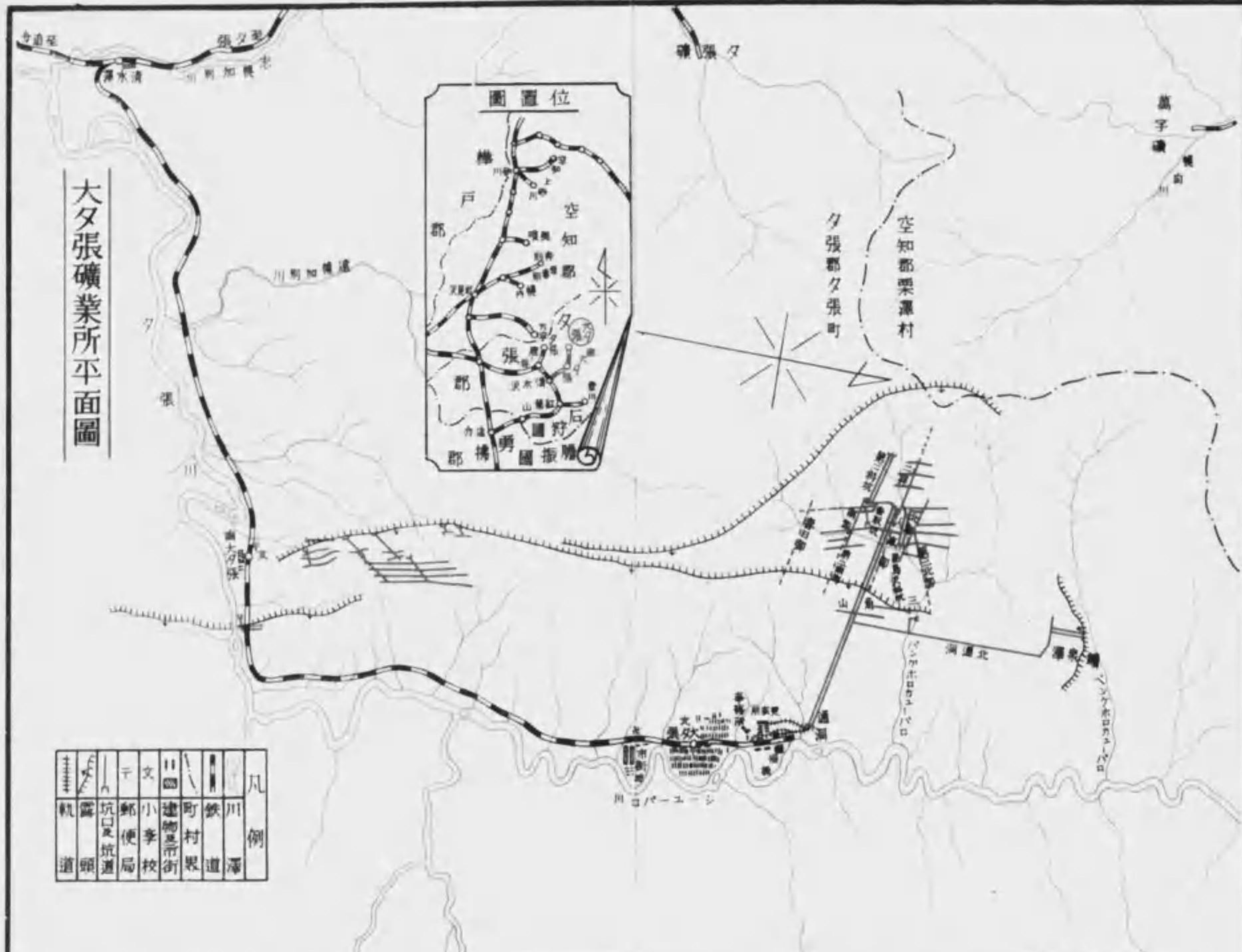
圖面平礦炭別尺



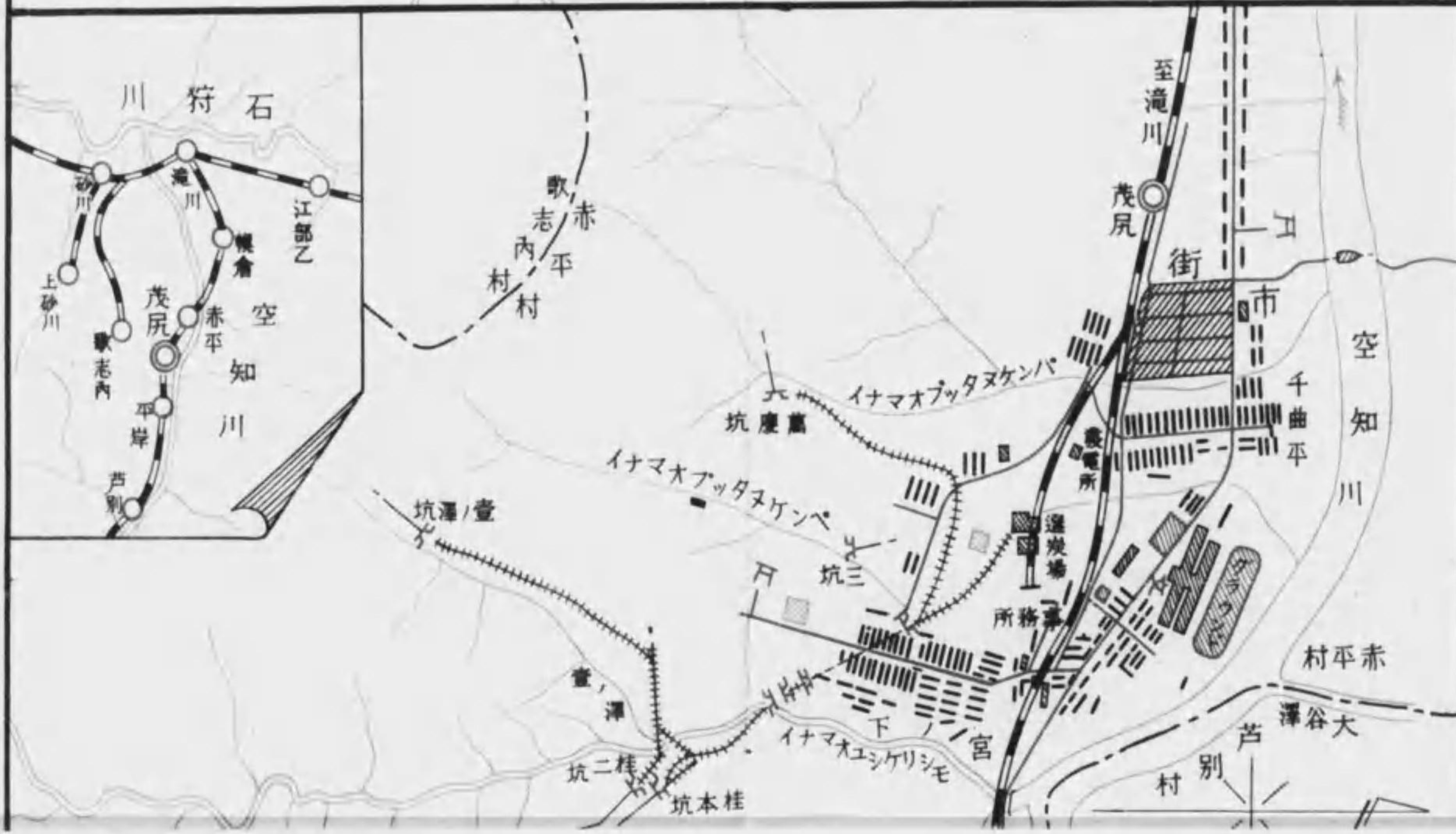
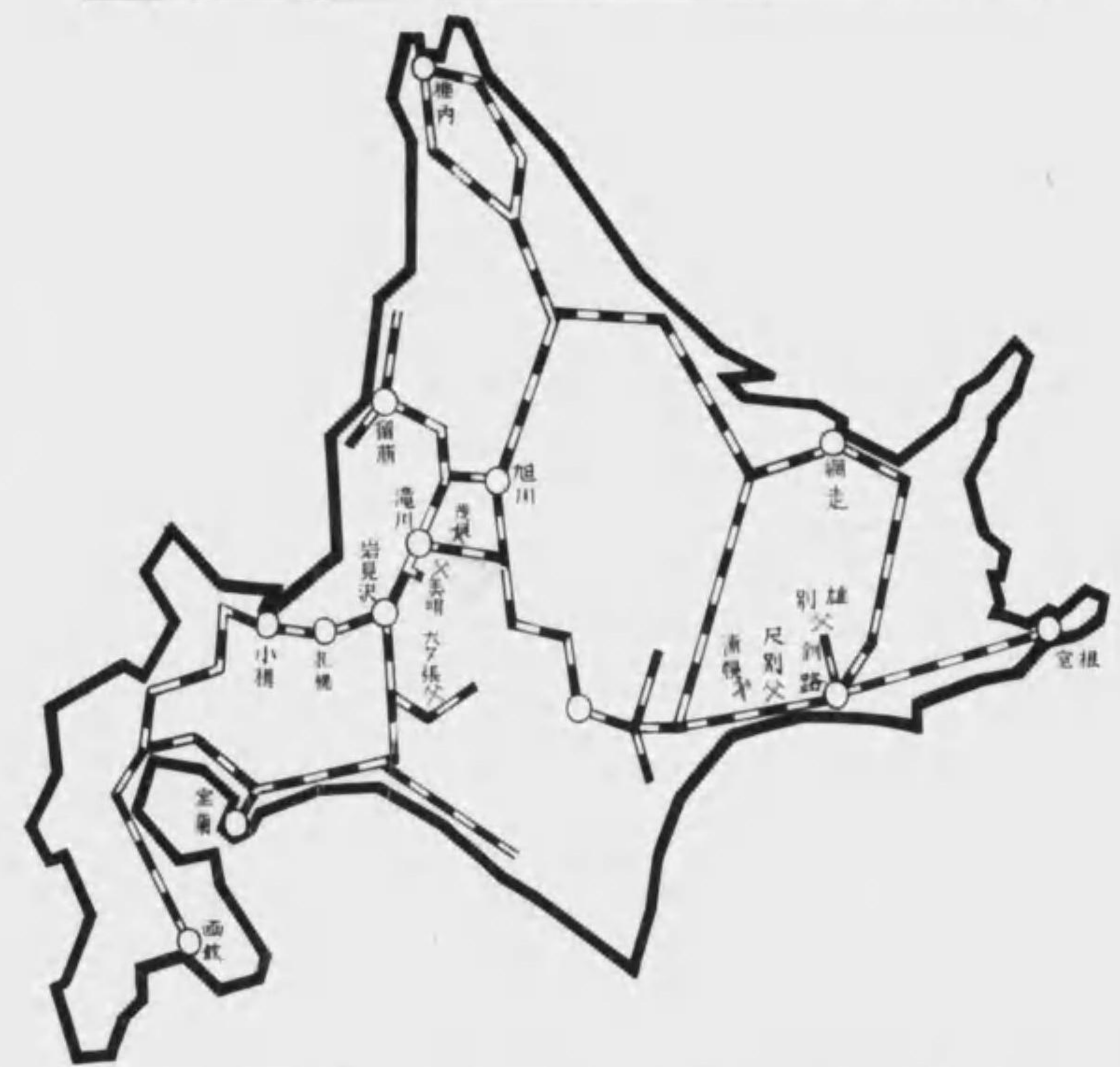
圖面平所業礦別雄







北海道の三ノ菱炭坑の位置略圖



浦幌炭礦平面圖



尺別炭礦平面圖













375  
810

昭和十二年八月十五日印刷  
昭和十二年八月二十日發行

(非賣品)

編輯兼 發行者	小樽市色内町八丁目三番地 三菱鑛業株式會社小樽支店內	加藤伸市
印刷所	小樽市色内町八丁目二番地	鹽野其水堂
印刷人	小樽市色内町八丁目二番地	菊地一之



終

